

情報源の重要性を体験するワークショップの提案

○矢舗カレン (KAREN YASHIKI)、藤代裕之 (HIROYUKI FUJISHIRO)

Keywords : フェイクニュース、情報源、メディアリテラシー、こたつ記事

1 目的

本研究の目的は高校生に情報源の重要性を体験してもらうことである。2016年のアメリカ大統領選以降に表面化した偽・誤情報の拡散は情報の信頼性を根底から脅かしている(耳塚 2020)。フェイクニュースを生み出す構造に「こたつ」記事があり、情報源の不透明さが問題となっている(藤代 2021)が、インターネットで情報の出所を気にする人は半数程度にとどまっている(新聞通信調査会)。情報源の重要性は指摘されながら、それを体験するワークショップは十分に検討されていない。

2 方法

複数の情報源をもとにした架空の「こたつ」記事を作成。情報源を探すことで、情報源を確認することが重要であることを楽しみながら体験してもらうことを目指した。記事中には情報源を6つ配置し、インターネットを検索すれば容易に特定可能な情報源を4つ、調べても特定できない情報源を1つ、嘘の情報源を1つとした。特定可能な情報源では、手がかりとしてメディア名や日時が具体的に記述されたものと、曖昧なものを用意した。特定できない情報源は「こたつ」記事によく使われる「SNSでは」とした。ワークショップは、埼玉県立飯能高校と東京都立小川高校の計2校の協力を得て実施した。飯能高校では2年生を対象に3クラス、小川高校では3年生を対象に1クラスで実施した。

3 結果

特定できる情報の中でも「静岡新聞の5月17日報道」や「静岡テレビ永見佳織アナはスポーツ紙のコラムで」のようにメディア名や日時が具体的に記述されたものは情報源を検索して見つけることができた。その一方で、「地元テレビ局」とした曖昧な情報源では、GoogleのAIの検索概要である「オーバビュー」を参考にし、間違った情報源を回答した高校生もいた。「コメントでは」という嘘の情報(架空の情報源)については、その情報源が存在しないことを確認できていた。授業後のアンケートでは「情報源を辿るとき抽象的なことしか書いてないと、どこを調べたらいいかわからなくて大変だった」「SNSとかコメントとかキーワードが簡単なものにつれて調べるのが難しく感じた」という意見があった。

4 結論

メディア名や日時が具体的に書かれているものは情報源が探しやすく、「SNS」や「コメント」といった曖昧な場合は不確実なものという情報源の重要性を体験してもらうことができた。

【主要参考文献】

耳塚佳代(2020)「「フェイクニュース」時代におけるメディアリテラシー教育のあり方」『社会情報学』8(3)、1-13

藤代裕之(2021)『フェイクニュースの生態系』青弓社

新聞通信調査会(2024)「第17回メディアに関する全国世論調査」